

英語教育における ICT を活用した個別最適な学びと協働的な学びの実践報告

仙台市立茂庭台中学校 教諭 遠藤 沙織

1 はじめに

「令和の日本型学校教育の構築を目指して（中教審第228号）」では、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びを実現するためには、学校教育の基盤的なツールとして、ICT は必要不可欠なものである。」¹⁾とあり、我々教員に、これまで以上に ICT 活用のスキルが求められることは言うまでもない。

さらに、Society5.0 時代に備えて AI に置き換えられない資質・能力を育成していくことが必要であるため、教科指導の指導技術に加え、児童生徒が将来どういふ社会で生きていくのか、といった視点を持って教育活動を進めていくことが必須であると考えます。

さて、本校では、「基礎的・基本的な知識及び技能を習得した生徒の育成～ICT を効果的に活用した授業と家庭学習の習慣化を通して～」という研究主題の下、日常的に ICT を活用した実践を行っている。本実践では、デジタル教科書の資料映像、文法解説動画、ロイロノート（シンキングツール、資料箱や提出箱、付箋機能）を活用した授業づくりについて提案する。

2 実践の概要

(1) 単元について

今回実践した単元は、表1のとおりである。事前アンケートの集計結果から、世界各国の生活習慣やマナーについて正しく理解している生徒の割合が低い（「分からない」、「未記入」の割合が67.8%）ことが明らかになったため、理解を深められるような方策を検討した。

また、本単元では英語の4技能のうち「話すこと（やり取り）」を中心に授業を展開した。英語を学ぶ必要性は感じているが、英語が好きな生徒の

割合が低い（30%）実態であることから、生徒が課題に取り組みやすいように、他の生徒と互いに教え合ったり、クロームブックを活用し、分からない単語の意味を調べたりする場面を設定した。

教科	外国語（英語）	学年	2 学年
単元名	Unit 4 Homestay in the United States (東京書籍)		
ねらい	日本と世界各国の生活習慣やマナーを整理し、その内容を伝え合うことができる。		

表1 単元の詳細

(2) デジタル教科書の資料映像と文法解説動画の活用

本単元の導入では、ホームステイについて理解を深めさせるためにデジタル教科書の資料映像を視聴させた。

新しい英文法に触れる際は、視覚的、聴覚的に興味を引きやすい解説動画を活用した。動画は5分ほどにまとめられているため、生徒の活動する時間を確保できるだけでなく、教材研究をする時間が短縮された。また、単元全体を通して、同じテーマで展開されるため、生徒がじっくりと課題に向き合うことができた。

(3) ロイロノートの活用

本単元では、ねらいを達成させるために、情報を収集、整理、比較、具体化、発表する場面で、ロイロノートのシンキングツール（Y チャート、ベン図、クラゲチャート）を活用した。

図1は、伝えたい日本の生活習慣について、① have to ② don't have to ③ must ④ mustn't ⑤ advice の5つの視点でまとめさせたクラゲチャートである。クラゲチャートの空欄部分の全てを埋めた状態で発表した生徒もいれば、自分の学習到達度に応じ、1, 2個の英文でまとめたり、英文の代わりにイラストを用いてまとめたりした生徒もいた。学習到達度に応じて活動を選択で

きただけでなく、多くの情報の中で、最も伝えたいことを焦点化させることもできた。



図1 生徒がまとめたロイロノートのシンキングツール（クラゲチャート）



図2 表現活動の様子

3 成果と課題

(1) 成果

①学習内容の蓄積と共有

毎時間、ロイロノートのシンキングツールにまとめたデータは提出箱に提出させ、お互いの取組を見られるようにした。情報を共有することで、情報の整理の方法を学んだり、知らなかった情報を得て、自分から調べたりする様子が見られた。

また、授業の帯活動では、生徒がまとめたベン図を用いて、英語の表現活動に活用した(図2)。生徒自身のアイデアを取り入れて表現活動を行うことにより、生徒一人一人が意欲的に取り組むのみならず、生徒同士の交流を図ることができ、協働的な学びを実現することができた。

②知識・技能の向上

ICTを活用していなかった時の文法確認テストの平均点達成率が55%だったのに対し、クロームブックを活用する習慣が身に付いてからのテストでは、66%に上がった。中位層から上位層の知識の定着が深まっていることが実感できた。しかし、下位層の点数はほぼ変わらなかったため、今後は下位層に対する支援策を検討していきたい。

(2) 課題

①情報モラル

考えを上手くまとめられない生徒の支援策として、共有された内容を参考に、自分の思考を整理させた。しかし、他の生徒の意見を参考にして書いたものなのか否かを教師側が判断できなくなることがあった。今後は、どの生徒の考えを参考にしたのかを明記させ、著作権についても意識させる必要がある。

②クロームブックを使う際のルールの徹底

教師が説明をしている際に一部の生徒がクロームブックを使い続け、指示を聞いていない場面があった。今後は、教師が説明をする際には、クロームブックを閉じさせ（完全に閉じてしまうと、スリープになってしまうため、画面を斜めにする等の工夫）、顔を上げて話を聞かせる等、基本的なルールを徹底していきたい。

4 おわりに

デジタル教科書の資料映像、文法解説動画、ロイロノートなどICTを活用することで、個別最適な学びと協働的な学びの在り方について考えることができ、生徒の知識・技能を向上させることができた。

家庭学習については、あまり習慣化していないという課題がある。今後は、デジタルドリルを活用して、補充的・発展的な内容に取り組みせ、個別の支援を行っていきたい。

文献 1)「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)(中教審第228号)